

## 第 139 回 埼玉大学教育学部の 3 校長像

筆者：林 久治（記載：2020 年 10 月 31 日）

### （1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気侷な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

私は武漢肺炎の緊急事態宣言が出され外出を自粛していたが、緊急事態宣言が解除されたので、銅像探索を再開している。しかし、大阪に行くことはまだ自粛しているため、東京で銅像探索を行いその探索記を書いた ([123 回の記事/f](#)、[124 回の記事/f](#)、[125 回の記事/f](#)、[126 回の記事/f](#)、[127 回の記事/f](#)、[128 回の記事/f](#)、[129 回の記事/f](#)、[130 回の記事/f](#)、[131 回の記事/f](#)、[132 回の記事/f](#)、[133 回の記事/f](#)、[134 回の記事/f](#)、[135 回の記事/f](#)、[136 回の記事/f](#)、及び[137 回の記事/f](#))。

私は 10 月 13 日に、埼玉県シリーズの銅像探索で、東上線沿線の鶴瀬駅と上福岡駅の近郊に行った。[137 回の記事/f](#)では鶴瀬駅での探索記を書いた。[前回の記事/f](#)では、上福岡駅での探索記を書いた。埼玉県と言えば、県下唯一の国立大学である埼玉大学の銅像は[1\) のサイト/](#)には未だ収録されていない。そこで、「埼玉大学の銅像」で検索すると、1 件しかヒットしなかった。ヒットしたのは、[2\) のサイト/f](#)であった。そこには、次のような記事があった。

教育学部の裏手にある、教員養成に力を尽くした 3 人の校長の銅像。その内、一番右の野口源三郎先生は、学校教育にスポーツを導入した人物として知られ、NHK の大河ドラマ「いだてん」にも登場します。

そこで、私は 10 月 27 日に埼玉大学に行き、これらの銅像を探索した。本稿はその探索記である。なお、本稿においては、資料の記述を緑文字で、私（林）の意見や説明を青文字で記載する。

### （2）埼玉大学の概要

ウィキペディアには、埼玉大学（以後、埼玉大と略記する）の成立経緯を次のように書いている。

埼玉大学は官立浦和高等学校（1921 年（大正 10 年）が起源の文科・理科からなる官立の旧制高等学校）、埼玉師範学校（1873 年（明治 6 年）が起源）、埼玉青年師範学校（1922 年（大正 11 年）が起源）の 3 校を統合して、1949 年（昭和 24 年）に新制国立大学として設立された。現在では 5 学部（教養・教育・経済・理・工）、3 大学院研究科（人文社会科学・教育学・理工学）を有する総合大学であり、また埼玉県で唯一の国立大学である。



図1. 上：現在の埼玉大の周辺地図、下：1924年の浦和町の地図。  
両図とも、[3\) のサイト/e](#)より借用。

図1上に現在の埼玉大の周辺地図を、図1下には1924年の浦和町の地図を示す。図1上からも分かるように、現在の埼玉大はさいたま市の中心部から遠く離れた場所に移転統合されている。一般的なアクセス方法は、埼京線南与野駅からバスを利用することである。私は理研退職（2002年）の前後に、埼玉大に仕事でよく行ったが、自宅から南与野駅まで行くのが遠く、南与野駅からバス便は混雑して座れないのが難儀であった。

図1下からも分かるように、1924年の浦和町には中学校はもとより、男子師範学校や女子師範学校の他、高等学校まで設置されていた。市制を施行することも出来

ない小さい浦和町に、これだけの教育機関が密集していることが驚きである。浦和町は、1934年になってやっと、埼玉県では川崎市、熊谷市、川口市に次ぐ4番目となる市制を施行した。

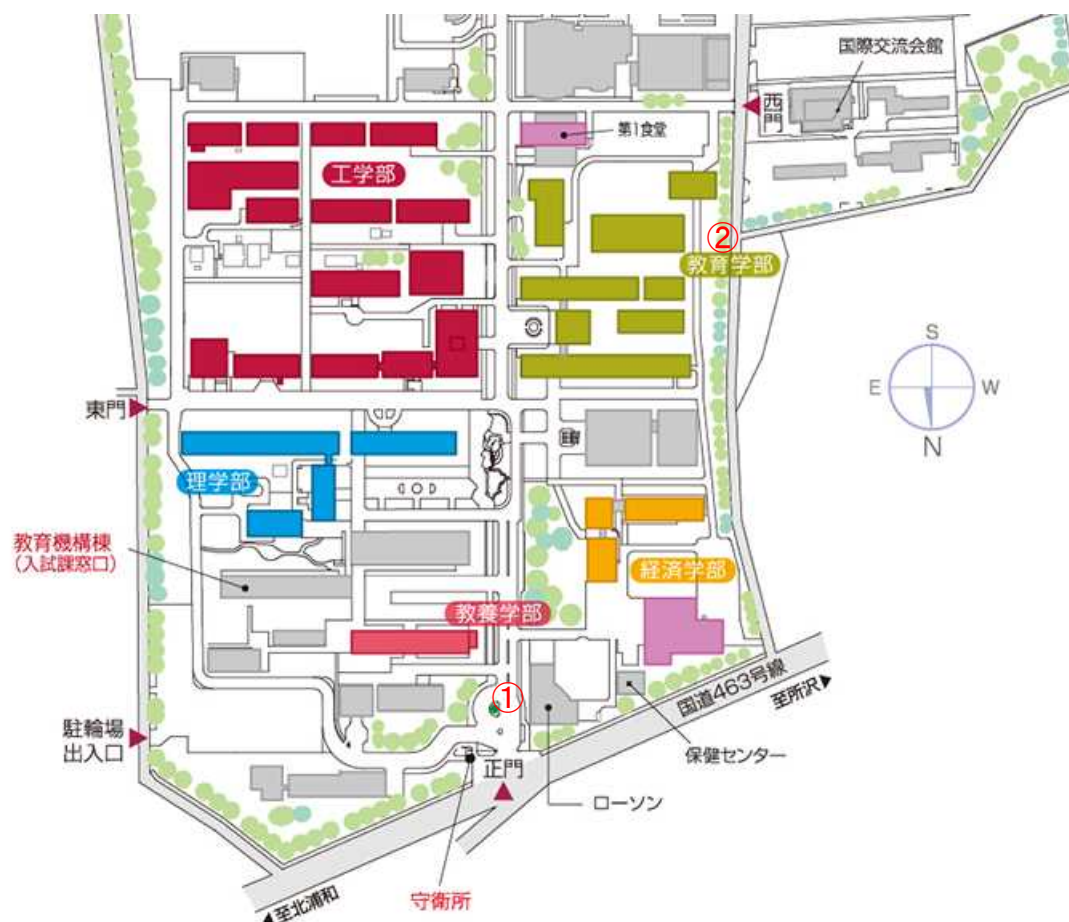


図2. 埼玉大学の構内図（北半分） 本図は、[4\)のサイト/](#)より借用。

①：バス停、②：教員養成に力を尽くした3人の校長の銅像。

図2に埼玉大学の構内図（北半分）を示す。南半分には、各種の運動場がある。本図が示すように、埼玉大のバス停（図2の①地点）は正門や守衛所の内側にある。従って、バスを利用して来る外来者を入構禁止にするのは、やりにくいと思われる。そこで、私はバスを利用して埼玉大に立ち入ることを試みた訳である。

### （3）東武東上線志木駅から埼玉大へ

私は10月27日に、自宅から近い志木駅から路線バスで埼玉大へ行った。次ページの図3上に、埼玉大に行くバス路線を示す。前記のように、一般的なアクセス方法は、埼京線南与野駅からバスを利用することである。しかし、私の自宅がある練馬区大泉学園から南与野駅へ行くのは乗り換えが多くて煩わしい。そこで、今回は自宅から近い志木駅から埼玉大へ行った。



図 3. 埼大に行くバス路線、本図は、[5\) のサイト/1](#)より借用。

私は、志木駅から埼大へ行くバス路線があることは知っていたが、20世紀には首都圏のバスは渋滞が酷かったので、止む無く南与野駅から埼大に行っていた。ところが、私が最近銅像探索をするようになって、バスを利用することが増えたが、「最近のバスはあまり渋滞しない」との印象を持つようになった。本年のコロナ禍は特別であるが、その前から私はそのような印象を持つようになった。多分、道路整備が進んだからであろう。

当日の朝、私が志木駅東口で下車すると、大変分かりやすい**バス案内板**があった。首都圏の駅では、このようなバス案内板がある所は意外に少なく、志木駅では埼大行きのバス乗場を探すのに、大変便利であった。埼大行きのバスは、**④番乗場**から国際興業バスの「志 03-3 系統」を利用することが分かった。ただ、この路線の本数は少なく、朝のラッシュ時で1時間に4本程度、昼間は1時間に2本程度しかなかった。私は20分位待つ必要があったが、その間に志木駅を探索することが出来た。

志木駅東口から埼大までのバスは、かなりの距離がある。しかし、今回は渋滞に会うことなく、大変スムーズに約25分で到着することが出来た。埼大のバス停は正門の奥にあるので、私の予想通りバス停から自由に構内に入ることが出来た。埼大は不便な所にあるので、部外者の訪問は稀なのであろう。私にとって埼大は、勝手知ったる他人の家なので、難なく教育学部の裏庭（図2の②地点）にある3銅像を発見することが出来た。

#### (4) 三校長の銅像

埼大・教育学部の裏庭（図2の②地点）に、3体の胸像が設置されていた。その写真を次ページの図4上に示す。設置場所は大変殺風景な所で、まるで処刑場のようであった。胸像を設置するなら、もっと優遇すべきである。

(本文は6ページに続く。)

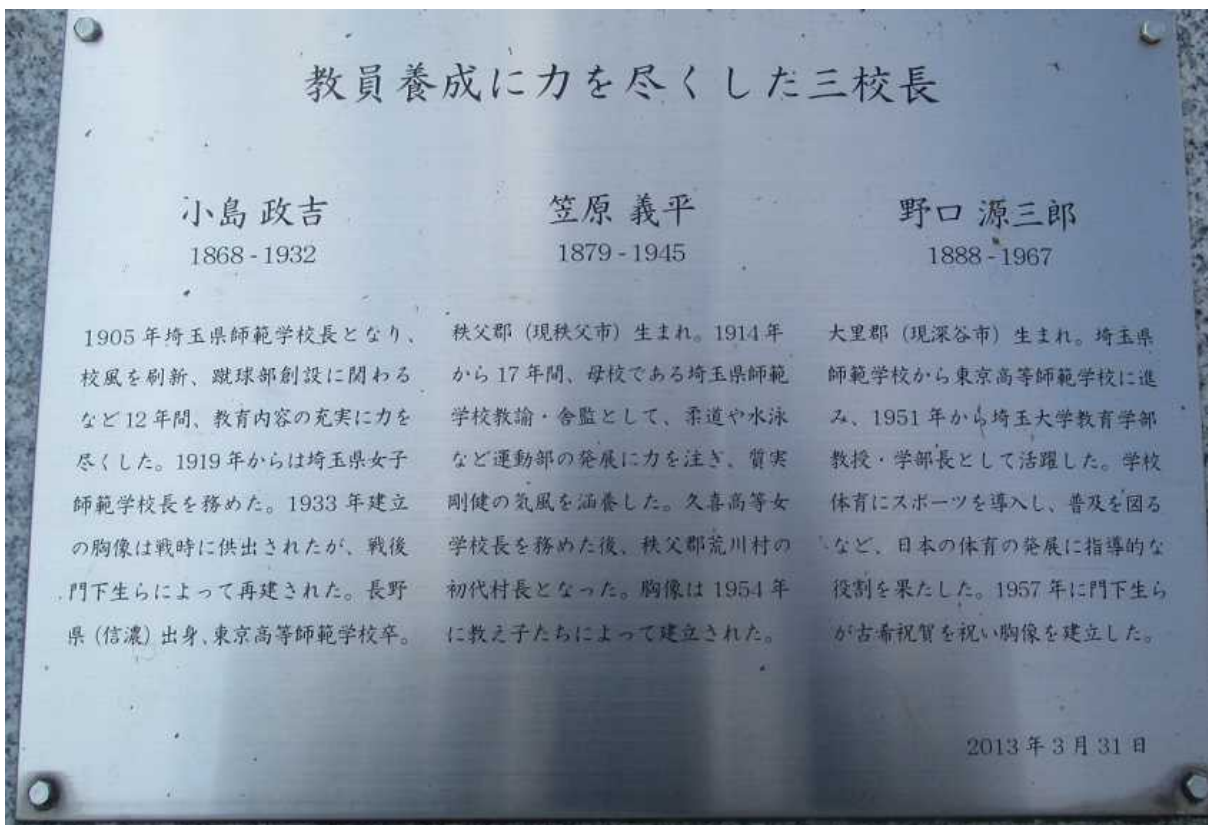


図4. 上：三校長の銅像、下：3銅像の案内板。

3 胸像の脇には、図 4 下のような案内板があった。それには、次のように記載されていた。教員養成に力を尽くした三校長

小島政吉 (1868-1932)

1905 年埼玉県師範学校長となり、校風を刷新、蹴球部創設に関わるなど 12 年間、教育内容の充実力を尽くした。1919 年からは埼玉県女子師範学校長を務めた。1933 年建立の銅像は戦時に供出されたが、戦後門下生らによって再建された。長野県（信濃）出身、東京高等師範学校卒。

笠原義平 (1879-1945)

秩父郡（現秩父市）生まれ。1914 年から 17 年間、母校である埼玉県師範学校教諭・舎監として、柔道や水泳など運動部の発展に力を注ぎ、質実剛健の気風を涵養した。久喜高等女学校長を務めた後、秩父郡荒川村の村長となった。胸像は 1954 年に教え子たちによって建立された。

野口源三郎 (1888-1967)

大里郡（現深谷市）生まれ。埼玉県師範学校から東京高等師範学校に進み、1951 年から埼玉大学教育学部教授・学部長として活躍した。学校体育にスポーツを導入し、普及を図るなど、日本の体育の発展に指導的な役割を果たした。1957 年に門下生らが古稀祝賀を祝い胸像を建立した。

2013 年 3 月 31 日

図 4 上に示した三校長の銅像の中で、向かって左側の胸像を図 5 左に示す。その台座の正面には、「小島先生像」と貼られていた（図 5 右）。また、胸像の背面には作者の銘が「四郎作」と彫られていた。



図 5. 左：小島先生像、右：台座正面の像主名。

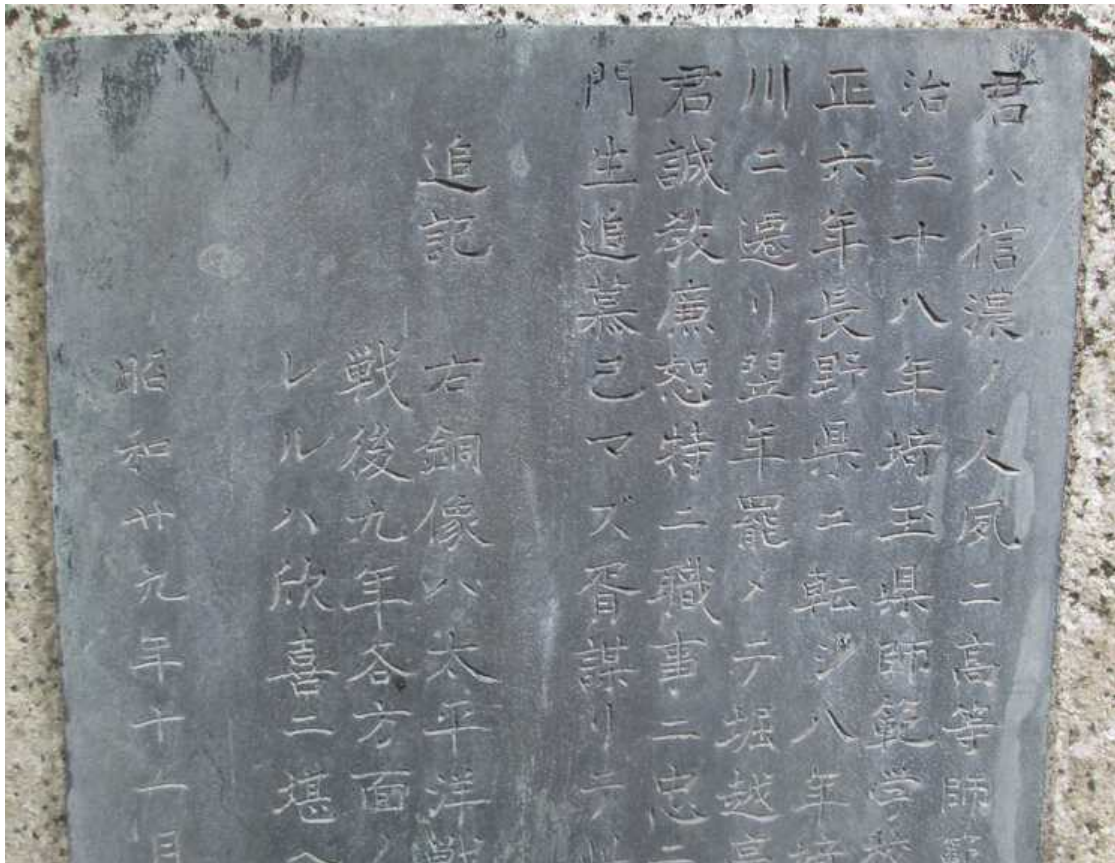


図6. 台座背面の撰文。

台座の背面には細長い撰文が貼られていた。その上部を図6に示す。この撰文は1954年に彫られたが、現在でも明瞭で解読することが出来た。その文面を以下に示す。

君ハ信濃ノ人夙ニ高等師範学校ニ学ビ長野東京和歌山愛知ノ諸校ニ歴任シ明治三十八年埼玉県師範学校長ニナル励精衆ヲ率キ躬行範ヲ垂レ校風蔚興ス大正六年長野県ニ転ジ八年埼玉県女子師範学校長ニ任ズ人皆徳ニ懐ク十一年香川ニ還リ翌年罷メテ堀越高等女学校ヲ薫ス昭和七年四月十四日卒ス年六十五君誠教廩怒特ニ職事ニ忠ニ尤モ情誼ニ厚シ教壇四十余年愛以テ之ヲ貫ク友僚門下生追慕已マズ胥謀リテ此ノ像ヲ樹ツ 昭和八年四月 吉田弥平撰  
追記 右銅像ハ太平洋戦争ノ勃発ニ由リ撤去供出ノ止ムナキニ至ル今ヤ戦後九年各方面ノ賛同協力ヲ得テ再び其偉容ヲ旧跡台上ニ仰グニ至レルハ欣喜ニ堪ヘズ依テ建立ノ由来ヲ記シテ後世ニ伝フ  
昭和廿九年十一月七日 小島政吉先生銅像再建会 北蓮書

なお、上記の撰文で、昭和八年は1933年であり、昭和廿九年は1954年である。また、用語の意味や読み方は次の通りである。①「夙に」(ツトニと読み)、意味は「ずっと以前から。早くから。」である。②「躬行(キュウコウ)」は「自ら物事を実行すること」である。③「蔚然(ウツゼン)」は「草木のさかんにしげるさま」である。④「胥謀リテ」は「アイハカリテ」と読む。

(本文は9ページに続く。)



図7. 上左：笠原先生像、上右：台座正面の像主名、下：笠原像背面の撰文。



図4上に示した三校長の銅像の中で、中央の胸像を図7上左に示す。その台座の正面には、「笠原先生像」との像主名（図7上右）が貼られていた。本像の背面には撰文が彫られていた。その写真を図7下に示す。その文面を以下に示す。

笠原義平先生は

明治十二年秩父郡荒川村に生れ大正三年母校埼玉師範に奉職以来十七年よく質実剛健の気風を興し特に舎監として率先躬行厳格にして温情を堪え師道の根柢に培はる加ふるに体育の啓蒙柔道の普及水泳の奨励等画策頗る多く感化全県に及ぶ出て久喜高等女学校長となり退いて郷里の村長に推され昭和二十年七月清節を全うし六十七歳の生涯を自ら閉じらる知友門下欽慕してここに胸像を建つ 彰徳会撰文 服部誠一書 昭和廿八年秋

中埜四郎作

なお、昭和廿八年は1953年である。上記の「昭和二十年七月清節を全うし六十七歳の生涯を自ら閉じらる」とは、日本帝国の戦争責任を感じて、自決されたのだろうか？

図4上に示した三校長の銅像の中で、向かって右側の胸像を図8左に示す。その台座の正面には、「野口先生像」との像主名（図8右）が貼られていた。本像の台座背面には撰文が貼られていた。その上半分の写真を図9に示す。また、本像の背面には「昭和卅二年九月 中埜四郎作」との作者名が彫られていた。



図8. 左：小島先生像、右：台座正面の像主名。

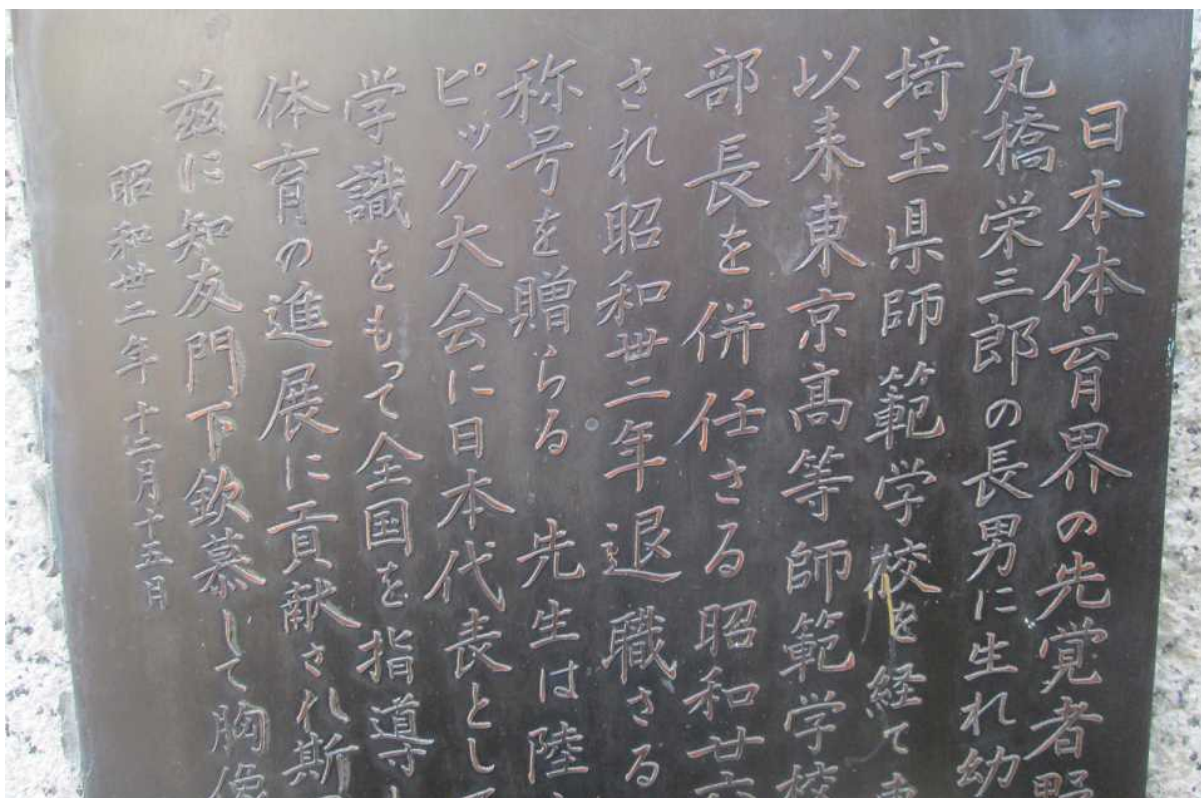


図9. 台座背面の撰文の上半分。

野口先生像の撰文（図9）には、次のように書かれている。

日本体育界の先覚者野口源三郎先生は明治廿一年埼玉県大里郡八基村丸橋栄三郎の長男に生まれ幼少より岡部村野口八十郎の養子となる埼玉県師範学校を経て東京高等師範学校に体育を専攻され大正七年以来東京高等師範学校東京教育大学に在職し後年は教授と体育学部長を併任する昭和廿六年より埼玉大学教育学部教授教育学部長として活躍され昭和廿二年退職する東京教育大学並に埼玉大学より名誉教授の称号を贈らる 先生は陸上競技に長ぜられ大正九年第七回国際オリンピック大会に日本代表として参加しついでに二回西欧各国を歴訪さる高邁なる学識をもって全国を指導し特にスポーツを初めて学校体育に導入し日本体育の進展に貢献され斯界の最高権威と仰がれて古稀の寿を迎えらる 慈に知友門下欽慕して胸像を建つ 野口源三郎先生古稀祝賀記念会 昭和廿二年十二月十五日 高崎藤蔵撰文服部北蓮書

なお、昭和廿二年は1957年である。

図4下に示した案内板には、野口先生の業績が次のように書かれている。「学校体育にスポーツを導入し、普及を図るなど、日本の体育の発展に指導的な役割を果たした。」このような美辞麗句では、野口先生の具体的な業績が少しも伝わってこない。私は今回まで野口先生の名前も知らなかったのだが、[2\) のサイト/f](#)によれば「先生はNHKの大河ドラマ「いだてん」にも登場した」ようである。そこら辺を調べてみると、「野口先生はとんでもない大人物だった」ことが判明した。

ウィキペディア（1920年アントワープオリンピックの日本選手団）には、次のように書かれている。

1920年4月20日から9月12日まで開催された1920年アントワープオリンピックに、役員3名（団長は嘉納治五郎）、選手15名の日本選手団が参加した。開会式には、旗手は主将の野口源三郎、国名プラカードは金栗四三が持った。競技結果は、陸上競技と水泳においては殆どの選手が予選落ちであった。野口源三郎（体協幹事）は男子十種競技で12位となり、これが日本陸上陣の最高成績であった。日本選手団の最も華々しい成績は、テニス競技で熊谷一弥（三菱銀行）が男子シングルスで銀メダルを、柏尾誠一郎・熊谷一弥組が男子ダブルスで銀メダルを獲得したことである。これが、日本及びアジア初のメダル獲得となった。

日本代表の面々は、この闘いを永遠に忘れず、日本のスポーツ発展に尽くすことを誓い、「白黎会」を結成した。白黎会とは、ベルギーの漢字表記「白耳義」から「白」、「黎明」という言葉から「黎」の字を取ったものであり、スポーツも社交界に出て交歓すべしという、主将・野口源三郎の考えから生まれた会であった。白黎会のメンバーはオリンピックから帰国後、Hの字が入った揃いのトレーニングシャツを着てスポーツを楽しんだ。野口は「白黎生」を号（ペンネーム）とし、本人の希望で戒名「白黎院転輪法浩日源居士」にも白黎の文字を入れている。最後の存命者は大浦留市で、1989年（平成元年）8月28日、93歳で逝去した。

これまでの資料より、以上の3像の作者は中埜四郎氏であることが分かった。

[6\) のサイト/1](#)には、中野（中埜）四郎氏の経歴が次のように書かれている。

彫刻家、創型会代表の中野四郎は、1968年2月13日午後10時45分、狭心症のため浦和市の自宅で死去した。享年66歳。告別式は18日、同市常盤6-1のカトリック浦和教会で行なわれた。明治34（1901）年11月15日、山口県下関市の漢学者の家に生まれた。大正12年東京美術学校彫刻科本科木彫部に入部、特待生に選定され、昭和3年3月同校を卒業、卒業製作「春陽」が学校買上げとなった。卒業の年の秋から帝展、文展に10数回入選、昭和16年以降、文展無鑑査となって官展系の中堅作家として嘱望された。一方、昭和2年より6年までの同窓卒業生の有志が集まって木彫の研究団体、九元社を8年に結成し、その中心的メンバーとして毎年同展に作品を発表した。26年10月、戦時中解散した九元会の会員有志と計って創型会を結成、翌年創立第1回展を東京都美術館彫刻室で開催して以来、毎年美術界唯一の特色ある彫刻単一公募団体展を開き、彫刻の一般社会生活との協和普及をはかり新人作家の養成指導につとめてきたが、彼は最初から事務所を自宅に置き（15回展まで）、率先その代表者となって、会の基礎づくりと育成に偉大な貢献をなしたことは特筆に価する。晩期の作風は、終始写実的態度を堅持しながら、主にセメントを駆使してバロック風の力強く堅実な造型に特色を示した。26年4月より没前まで国立埼玉大学教育学部美術科に講師として彫塑を教授、38年4月から42年2月まで星美短大教授を兼ねた。

また、以上の3像の撰文は服部誠一（北蓮）氏の書であることも分かった。[7\) のサイト](#)には、服部氏の略歴が次のように書かれている。

服部北蓮は明治32（1899）年4月3日生まれの昭和時代の書家。埼玉大、二松学舎大の教授を歴任。埼玉県書道人連盟会長、埼玉県美術家協会副会長などをつとめた。昭和61（1986）年5月2日死去。87歳。埼玉県出身。埼玉師範卒。本名は誠一。著作に「日本書道文化史」など。

以上の資料などにより、三校長像の概要は次の通りである。

#### ①小島政吉先生像

設置場所：埼玉県さいたま市桜区下大久保 255 埼玉大学教育学部裏庭

建立時期：1933年建立の銅像は戦時供出。1954年11月7日再建。

制作者：中野四郎（1901-1968）、埼玉大学教育学部美術科講師。

設置経緯（案内文）：小島先生（1868-1932）は1905年埼玉県師範学校長となり、校風を刷新、蹴球部創設に関わるなど12年間、教育内容の充実力を尽くした。1919年からは埼玉県女子師範学校長を務めた。1933年建立の銅像は戦時に供出されたが、戦後門下生らによって再建された。長野県（信濃）出身、東京高等師範学校卒。

### ②笠原義平先生像

設置場所：埼玉県さいたま市桜区下大久保 255 埼玉大学教育学部裏庭

建立時期：1954年

制作者：中野四郎（1901-1968）、埼玉大学教育学部美術科講師。

設置経緯（案内文）：笠原先生（1879-1945）は秩父郡（現秩父市）生まれ。1914年から17年間、母校である埼玉県師範学校教諭・舎監として、柔道や水泳など運動部の発展に力を注ぎ、質実剛健の気風を涵養した。久喜高等女学校長を務めた後、秩父郡荒川村の村長となった。胸像は1954年に教え子たちによって建立された。

### ③野口源三郎先生像

設置場所：埼玉県さいたま市桜区下大久保 255 埼玉大学教育学部裏庭

建立時期：1957年12月15日

制作者：中野四郎（1901-1968）、埼玉大学教育学部美術科講師。

設置経緯（案内文）：野口先生（1888-1967）は大里郡（現深谷市）生まれ。埼玉県師範学校から東京高等師範学校に進み、1951年から埼玉大学教育学部教授・学部長として活躍した。学校体育にスポーツを導入し、普及を図るなど、日本の体育の発展に指導的な役割を果たした。1957年に門下生らが古稀祝賀を祝い胸像を建立した。

（林の注釈）野口先生は1920年のアントワープ五輪に日本選手団の主将及び旗手として参加。十種目競技で12位を獲得（これは、日本の陸上競技で最高の成績）。以後、日本の五輪活動に指導的役割を果たす。

なお、上記の3像は1)のサイト/[の「日本の銅像ギャラリー」](#)の「さいたま市欄」に収録されている。設置場所は「さいたま市緑区・埼玉県教育センター」と記載されている。しかし、ウィキペディアには次のように書かれている。

2011年（平成23年）4月、埼玉県立総合教育センターのさいたま本所（さいたま市緑区三室）と深谷支所、埼玉県立スポーツ研修センターを機能統合の上、行田市（旧行田女子高等学校跡地）へ移転。

従って、埼玉県教育センターはさいたま市緑区には現在は存在しない。多分、本センターの移転時に、上記の3像は埼玉大教育学部に移管されたのであろう。

### 参考資料

1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>

2) のサイト：[サイダイコンシェルジュ第30号\(令和元年11月発行\)](#)

<http://www.saitama-u.ac.jp/guide/publicity/concierge/saidai30.pdf>

3) のサイト：

<https://blog.goo.ne.jp/manpoarukuhito/e/2710ce97891b69cecf23a17920d4bf0e>

- 4) のサイト：<http://www.saitama-u.ac.jp/entrance/guide/map/>
- 5) のサイト：<http://www.saitama-u.ac.jp/koho/guide/map/accessmap.html>
- 6) のサイト：<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9045.html>
- 7) のサイト：服部北蓮（デジタル版 日本人名大辞典+Plus の解説）